

読売俳壇

矢島 渚男 選

丹沢を地図に楽しむ炬燵かな

川口市 高橋まさお

【評】寒くなっても登山は出来ない。せめて、炬燵の上に地図を広げて若い日の思い出に耽ろうか。「丹沢」という具体性がいい。

よう来たと言はむばかりに草虱

千歳市 鶴谷 雪子

【評】久しぶりに選出して草虱の中を歩くと待ってましたとばかり草虱が纏いつく。「よう来たね」の口調で自然との交流の濃さが見える。屈伸をする老医師や秋の暮

東村山市 巢守たまご

【評】早くも暗くなった道から見える所に体操みたいなことをしている。白衣だ、あのお医者さんじゃないか。患者に言うばかりじゃなく、実行して居られるんだ。

裏山を彩る落葉朝日満つ

三郷市 村山 邦保

畔の口阿の口のある鱸干す

倉敷市 中路 修平

手ぶらでも行けさうな旅翁の忌

宝塚市 広田 祝世

晩酌に区切りをつける熟柿かな

志木市 谷村 康志

時刻表消える噂やそぞろ寒

東京都 尾崎 永治

子に泣かれ捨てし案山子を連れ帰る

島根県 重親 峯人

菊の花負の歴史こそ語り次げ

富士見市 阿部 泰夫

宇多喜代子 選

手のひらに納まる句集素十の忌

調布市 浅野 文男

【評】軽くて小さい句集。これに高野素十の句が載っている。それだけで素十の句を思い出す。大きな句集でないところに味がある。

姫と侍女同じ面差し菊人形

千葉市 森田千代子

【評】使われている菊に姫と侍女に差がある。姫には大輪の菊が多く使われ、侍女には小菊ばかり。中七に味がある。

月天心浅瀬をのぼる蛙の影

さいたま市 長山 弘文

【評】この景を見たことのある人でなければ出来ない句。「月天心」でこの夜の情景を大きく出して、動きのある蛙の様子を描いており、読み手の共感を誘う。

稲刈機囂の香りを残しけり

京都府 山田 国雄

吊り橋の四方に映える岩紅葉

南足柄市 柏木 茂

古丹波のぐい飲み似合ふ新酒かな

神戸市 大浜 義弘

秋草とつづやけばみな寂しさう

東京都 杉中 元敏

ポストへと消印有効九月尻

相模原市 姫本 陽子

秋晴や川向かいに友の家

四万十市 左山 遼

叱られてばかりいる子も稲架を組む

深谷市 酒井 清次

正木ゆう子 選

暇な日の床屋の秋の金魚かな

川越市 大野宥之介

【評】「暇な日」というのんびり感。ちよっとレトロ感のある「床屋」という呼称。季節外れの「秋の金魚」。三つが重なった癒やしの句。なんだかずつこの句の側に居たくなる。

大根干す狭き庭にも西ひがし

神奈川県 石原美枝子

【評】当たり前前すぎて俳句になってしまふ、という事がある。実感が伴っているからだろう。朝から夕方まで太陽を気にした一日だったのだ。抗菌と見ては購ふ冬隣

東京都 大関 貴子

【評】二種類売ってれば、抗菌の方を選ぶ。なるほど、そうかもしれない。何時の間にかすっかりバイ菌を寄せ付けなくなった私たち。転げつつ子ねずみ逃げる刈田かな

東京都 中島 徒雁

慰霊碑に余白魔の山草紅葉

茅ヶ崎市 大山 凡也

晩秋やただならぬ世の手にポタン

上尾市 宮本 朝紀

ゆりかもめ差し出す餌に朱き脚

大津市 西岡 信夫

大根抜く四股踏むほどこに腰落し

多摩市 高野 伸二

独り打ちつつけて尽きず鉦叩

東京都 望月 清彦

長梯子垂直にして松手入れ

東京都 野上 卓

小澤 實 選

ゴム式蝶ネクタイひつぱり合ふよ七五三

名古屋 可知 豊親

【評】七五三で会った、こども同士がふざけあっているのだ。「ゴム式蝶ネクタイ」という小道具が、いかにもこどものおしゃれらしくて、いい。ふたりとも五歳ぐらいか。男少な町内会の敬老日

川崎市 牛木 嗣男

【評】敬老の日に町内会に出てみたら、出席者は女性ばかりで、男性があまりに少ないことに驚いている。女性が圧倒的に長寿なのだ。縁側にバリカンの音小鳥来る

吹田市 翠簾屋信子

【評】縁側に出て、バリカンを使って、素人散髪をしている。こどもの髪を刈っているのか。小鳥が渡ってきそう、よく晴れた午後である。猿の子が石投げ返す秋の風

津市 中山 道春

放水で蓮根掘りや土柔ら

松戸市 倉林 高次

賀茂川の支流の支流芋水車

高槻市 村松 讓

首都高の灯の連なりや露の夜

栃木県 あらあひとし

まちじゆうが煙る秋刀魚のまつりかな

札幌市 藤林 正則

持山の松首示す遺言書

柏市 川浪 勉

群青の空をくまなく鱗雲

牛久市 中村 栄子